脳は"生きろ"と訴える

臨死体験や体外離脱…
指令機能に着目
メカニズム解説

臨死体験や体外離脱と聞いて何を思い浮かべるだろうか。「気のせい」「オカルト」「夢の出来事」…。そう考える人が多いかも知れない。ただ、最新の脳医学では、それらのメカニズムが説き明かされつつあるという。獨協医大病院の脳神経内科医で詩人の駒ケ嶺朋子さんの著書「死の医学」は、脳が見せるさまざまな現象をわかりやすく解説する科学エッセーだ。（藤田りか）

科学エッセー『死の医学』

信じがたい不思議な体験は、実は脳が引き起こした現象―。臨死体験どされる、きれいな花畑や川、その向こう岸などを見た経験は「宗教や文化、民族を超えて共通するものがある」と駒ケ嶺さん。こうしたことから「脳の機能に由来する生理的現象なのではないか」とする考え方が神経学一般の共通認識になってきたという。

獨協医大病院脳神経内科医　駒ケ嶺朋子さん

「生きる力の源はどこから来るのか」を探ったと話す駒ケ嶺さん＝6月、獨協医大

著書の題名には「死」とあるが、死や不思議体験だけを並べているわけではない。むしろ「脳は生存に有利となるように仕組まれたコントロールセンター」とし、「生きようとする力」に着目する。

例えば、天敵のクモに出合うと体を硬直させ崖から転がり落ちて逃げる南米のカエルの「擬死」。人間も被災体験など耐えがたい記憶を切り離すなどして、脳は苦痛を遠ざけ窮地を生き延びるべく画策していると説く。

だからこそ「人が『死にたい』と言うのは『よりよく生きたい』という希望の裏返し」。孤独に沈んだ人の本当の叫びを理解し、切り捨てず温かく見守る社会の実現を願う。

早稲田大第一文学部哲学科を卒業後、獨協医科大に入学。治療に当たる多くの患者から自身の病気だけでなく「未来の患者に役立てば」との思いを託されていると感じる。

本書は、患者に「育ててもらった」と感謝し、恩返しの気持ちを込めて書き上げた。6章編成で悲嘆の受容や再起などにも及ぶ。「医療者になりたい、病院で働きたいという若い人にも読んで欲しい」

集英社インターナショナル刊、968円。

こまがみね・ともこ　1977年、東京都生まれ。獨協医大内科学（神経）助教。2000年、現代詩手帖賞受賞。著書に「怪談に学ぶ脳神経内科」、詩集に「背丈ほどあるワレモコウ」などがある。